祈りの友 第185号

２０２２年８月

日本の子どもの救いのために ②

フレッド　田中

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。」
（1テサロニケ　5章16―18節）

前回のあらすじ
1933年、フレッド田中は日系二世としてカナダに生まれた。教会には通っていても、福音を聞くことがなかった少年時代。戦争が始まり、9歳のフレッドはロッキー山脈山中の強制収容所に。自然は厳しかったが、日本人の仲間と過ごした4年間はある意味楽しかった。
しかし終戦後、両親は日本に引き揚げることを選んだ。

終戦から一年後、昭和２１年８月、バンクーバー港から日本への最終引揚船「ひかわ丸」に乗り込み、見た事もない親の母国へ、約二週間の太平洋航海が始まった。

最初の二日間は天候が悪<、波が高かった。私を含めたほとんどの人が〝船酔いゲーゲー合唱団〟に加わった。食事もできず、睡眠もままならず、只々ゲーゲー合唱を続け、異様な臭いに包まれながら、揺れに任せて時が経っていったのである。

強制収容所はカナダとアメリカにたくさんあった。場所も待遇もさまざまだったと聞いた。確かに、そこは大変だった。しかし、戦争勃発から収容所に入るまで、そして終戦から数年間の辛さは、すべての面においても、比較できるものではなかった。

苦痛はあっても、望みはなかった時代

救われないまま、敗戦直後から両親の母国である日本、山口県の田舎に移住し、11年間を過ごすことになった。

敗戦後とはいえ、まだ「鬼畜米英」という響きが色濃く残っていた時代。敵国から来、また言葉もわからなかったこともあり、学校では「ヤンキー」とののしられた。靴を履き、髪を伸ばしているだけで、いじめの格好の標的とされた。

子どもは時に、無邪気なまでの残酷さを見せつけることがある。思春期を迎えたばかりの柔らかい心に、そうした体験は言葉にならないほどの苦痛となってのしかかってきた。死にたいと幾度も思った。情緒的、精神的苦痛に耐えるのみだった。

もしすでに救われていたら…、もし神さまの約束であるみことばをしっかり教えてもらっていたならば、状況は変わらなくても、きっと心の支えとして、強められていたのではないか、そう思えてならない。

野球と英語が救いだった
…しかし、心〈魂〉の救いはなかった時代

日本語という大きなハンディはあったが、中高生時代は野球と英語が得意だったことで、生活が一変した。同学年だけでなく上級生とも下級生ともよい交流ができ、しっかりしたよい仲間に恵まれ、明朗快活に過ごした。家庭生活はすごく貧乏で苦しかったけれど、両親と妹の４人家族、すごく幸せだった。

しかし、一人になった時に心のむなしさを覚えることが多<なってきた。何のために生きているのか…、死後の不安もあった。外面はいつも明るく振舞っていたが、内面は心のむなしさのゆえに非常に暗かった。

高校3年の夏、その思いが頂点に達した。

難病にかかり、生きがいであった野球を禁じられた。家でも役立たず、先が真っ暗になり、幾度も死を考えた。今では、神さまの愛とあわれみのゆえに、思いとどまらせてくださったと信じている。

やがて難病が癒され、高校を無事卒業した。しかし、心のむなしさと死後の不安の解決は見つからず、農業の将来性も見えなくなって、すべてをあきらめかけていた。その時、不思議な方法で自分の母国カナダへ帰る道が開かれた。

20歳を過ぎ、人生の道を選択するとき、日本を離れることを決意したのである。1957年、カナダのマッシュルーム農場と雇用契約を交わし、横浜港から出帆する船上で「二度とこの国の地は踏まない！」と〝さよなら宣言〟をしたのだった。

霊的誕生

カナダのオンタリオ州にある農場には、和歌山県のアメリカ村からたくさんの日本の青年が出稼ぎに行き、集団生活を営んでいた。そんな彼らに伝道するために日系二世の若い伝道者夫婦が信徒宅で集会を開いていた。

この夫妻の熱心な友情、愛情、分かりやすい福音伝道などの働きかけで、カナダについてから2週間後には教会に通うようになった。その献身的な働きに少なからず心を動かされた。しかし、信仰を受け入れるには至らなかった。「もっと努力して、よい人間になってからクリスチャンになろう」と思っていた。

ある時、トロント郊外で開かれたファミリーキャンプに参加した。この時、すべてが変わった。最後の晩、招きのメッセージを語る宣教師の言葉に、「自分が罪人であること、そしてイエス　キリストの十字架によるあがないを信じ、受け入れる以外に自分が救われる道はない」ということがはっきりと示された。

1957年8月9日、この日が私の霊的誕生日。

新しい出発

ハレルヤ！フレッド田中は救われた。神の子どもとして成長するスタートラインに立った。新しい人生の出発だ。心のむなしさが満たされ、死に対する不安がなくなり、勝利が与えられた。

あなたは〝不可能と思われることが可能になる〟と信じるだろうか。神さまは人の思いをはるかに超えて、私の人生に介入して<ださった。

救われてすぐに持ちかけられたのは、サスカチュワン州にある聖書学院への入学の話だった。渡航費用の借金に加え、農場と交わした3年間の雇用契約があったので、到底不可能なことに思えた。

その翌日のこと。数人がかりでベルトコンベヤーを持ち上げようとした瞬間、つかんでいた手が滑り、手の指の爪先を切断。足の甲にも激しい内出血を伴う大けがを負った。結局、3週間の入院生活を余儀な<され、病室のベッドの上で聖書を読みふけった。「退院しても、農場ではすぐには働けない…」と思った。

借金と雇用契約。そのことが脳裏をかすめたが、軽い気持ちで聖書学院に入学願書を送付してみた。数日後、聖書学院から届いた封書には、「授業は始まっている。すぐに来て<ださい」とあった。

退院の日、不安を抱えながら農場に戻った私を待っていたのは、知人の車に便乗して、同州に行く話だった。しかも出発はその翌日。まだ農場経営者に話さえしていない。意を決し、無理を承知で経営者に話してみた。帰ってきた答えは「いいんじゃない！」だった。

こうして聖書を学ぶ道が開かれた。学費や借金の問題も、思いもよらない方法で解決した。最初の一年間の学費は匿名の献金が与えられ、残りの学費と借金は、同じ額の労災保険が下りたのだ。

まるで道なきところに道が切り開かれていくように、次々と問題が解決されていく中で、神にしたがう者に与えられる恵みの大きさを教えられた。

（9月号が最終回です）

日本ＣＥＦ（日本児童福音伝道協会）
〒311-3434 茨城県小美玉市栗又四ケ 2421－6
TEL 0299(28)2031　URL:http://www.cef.or.jp
献金振替　00160-1-59313
（宗）日本児童福音伝道協会